

「歌え！」（コロサイ3章12～17節）

1 キリストの平和への招き

何のために、何を目指して、神様は私どもをこうして教会へと招いてくださったのだろうか、このように問うことは、あまり意味のない、観念的な、問いのための問いのように聞こえるかも知れません。それは救われるためであり、自分が、また自分たちが安心して生活していくためであり、また交わりの中で意味のある奉仕をするためである、さし当たってそうしたことしか思いつかないけれど・・・、そう言われる人がほとんどだと思います。

今こんな問いから私が始めたのは、今日の聖書箇所を何回も読んでいるうちに、そのように問うように、少し鋭角的な言い方をすれば、つきつけられていると思ったからです。

今日の箇所に、命令形で「くしなさい」という勧めの言葉がたくさん出てくることに一読してあるいはこれを聞いて気づかれると思います。最後までその調子です。しかしその中に、ただ一つ、目的を表している言葉が出てきます。「この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです」（15節）。この聖句で「一つの体」と言われているのはむろん教会のことです。教会を「キリストの体」と言い始めたのはパウロですが、とくに多く出てくるのはコロサイの信徒への手紙とエフェソの信徒への手紙です。いろいろな含みがあります。形あるもの、目に見えるもの、多様なものが一つにまとまっている存在、というような意味だとまずは考えておいてよいと思います。そこから教会とは復活のキリストが地上を歩んでいるそのお姿なのだとか、キリストは教会として今なおここにいますと考える人がいます。間違っていないと私は思います。ともあれ、私どもが「神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されている」（12節）のは、キリストの体なる教会においてキリストの「平和」にあずかるためなのだと言っています。そしてこう言われます、キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい（15節）。

キリストの平和ということは何が考えられなければならないのでしょうか。平和という言葉でふつう私どもは国と国のあいだの関係を考えますが、ここではそうではありません。また私どもが力を合わせてキリスト教的な平和を実現しなさいというのでもないのです。そうではなくてキリストの平和は客観的な実在としてすでにそこに存在します。それが私どもを支配しなければならぬということです。その分け前に私どもがあずかることが問題なのだと言うのです。キリストの平和とは何でしょうか。今日の箇所の直前二節にこう書いてあります。「そこには、もはや、ギリシア人とユダヤ人、割礼を受けた者と受けていない者、未開人、スキタイ人、奴隸、自由な身分の者の区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのものうちにおられるのです」。ここに記されているような民族と民族の対立、文化や宗教の対立、あ

るいは社会的な身分の対立、そうしたものが教会の中にも影響を及ぼし、問題となっていたことは、聖書の他のところからも知られます。しかしまさにキリストはそうしたことから来る仲違いをご自分の十字架として背負って人々のあいだに和解を実現してください。平和はキリストにおいてそこに存在する。キリストの体なる教会において平和が形をなしている。多様なものが一つとなって存在している。それにあざかること、その平和が私ども一人ひとりの心の深いところまで支配すること、それが神から選ばれた私どもの、聖なるものとされた私どもの、愛されている私どもが向かうべきところなのです。

2 歌う教会

キリストの平和にあずかるために私どもは教会に招かれた、そのことを今聖書によって申し上げます。さてその教会で私どもは何をするのでしょうか。あるいは教会は何のためにあるのでしょうか、改めて教会の目的を問うことも必要です。教会とは伝道するところである、福音の証し、宣教、別の言葉で言えば神の言葉を宣べ伝えるところである、すべてその通りです。もつと別の側面、もつと別の表現で言い表すことも可能だと思えます。そうした中で今日の聖書箇所は、私どもに教会とは歌うところだ、神を賛美することがその存在の目的だと語っています。それが果たされる場がまさしく礼拝なのです。

キリストの言葉があなたがたの内に豊かに宿るようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、論し合い、詩編と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい。(16節)。

この短い言葉は、礼拝を念頭において書かれたものです。私どものおこなっている礼拝のあれこれがみな上げられているわけではありませんが、それだけに礼拝ということで大切なことが簡潔に語られていると思えます。ここで第1に言われているのはキリストの言葉があなたがたの内に宿るようにしなさいということです。このキリストの言葉とはその時々々の聖書やその説き明かしとしての説教だけではありません。聖書に伝えられている福音です。キリストの救いの言葉です。こうした言葉を私どもが所有すると言うではありません。この福音によって私どもが本当に生かされるといふことです。ただ知っているといるのではなく、そうではなくてそれが私どもを生かす力として豊かに働くということです。そのようにしてみ言葉が私どもにおいて御教会においてみ霊により出来事となるということです。第2に、そうしたみ霊によつて御言葉が生きた力として働くことが、三つの言葉で描写されています。知恵を尽くして教え合うということ、互いに論し合う(戒め合う)ということ、それが二つ目です。そして三つ目に、歌うことが上げられています。ここのところは、あえて直訳しておきましょう。「恵みの中にあつて、あなたたちは、詩編、賛歌、それに霊的

な歌をもって、あなたたちの心で、神に向かって歌いなさい」。教会において御言葉が生きているということは、互いに教え合い、互いに戒め合い、そして心を込めて歌うことです。歌え！ 歌う教会、それが聖書の教会、御言葉の教会です。

一般会衆が自分の声で歌うことを礼拝の中に回復させたのは宗教改革者ルターに帰して間違いありません。同じ時代のスイスの改革者ツヴィングリは音楽がもつ人を陶醉させる性質をきらって礼拝から音楽を排除し、楽器も使わない讚美歌も歌わない教会をつくろうとしたと聞いています。カルヴァンは、これも人間の声の魅力に私どもが惑わされないようにということでしょうか、礼拝では単声モノソングで歌うことを要求した人です。しかし歌うことは排除しませんでした。それどころか詩編を全部歌おうとしてそれに節をつけさせて詩編歌として普及させたのです。私どもの讚美歌にもたくさん残っている通りです。歌わない教会は教会ではないのです。賛美する人の声をオルガンは支えます。

福音書で記憶に残る讚美歌は、あのよく知られた、最後の晩餐、イエスとの最後の食事のあとに、一同は讚美をうたってオリブ山へ出て行ったというくだりではないでしょうか（マルコ14・26）。使徒言行録には、初代教会は各家々に礼拝のために集まり、「・・・神を賛美していたので、民衆全体から好意をよせられていた」（使徒2・47）。と書いてあります。讚美歌が伝道をした歴史上最初の実例です。ヨハネの黙示録には、神の国で、新しい歌が響いていたという記述があります。地上で教会が歌うことは神の国の賛美につながっています。全地が、この世のすべての口が神を賛美する、教会はそのいわば先取りして歌う群れなのです。教会は神を賛美のために存在しています。

3 礼拝から礼拝へ

世のすべての人の神賛美を先取りして歌う群れ、それが教会です。そしてその賛美はとり分け礼拝において、もつとも力強く、また豊かに、うまいへたではなく、響きます。神を賛美して礼拝は終わります。しかしこの礼拝の終わりは私どもの週日の礼拝の始まりです。今日の聖書もそのことを語っています。

何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい（17節）。

この言葉は、主の日の礼拝を終えて、この世へと遣わされていく私どもの在り方を語っている言葉です。

先週の教会総会で礼拝前の時間を静思の時として静かに過ごすようみんなで心がけようという意見が出されました。こうした具体的で身近なことが総会で話し合われたことを喜んでいきます。礼拝は神を神とてあがめ賛美する時ですから、そのことに意を用いてみんが備えられるように気をつけたいと思います。

今日の聖書箇所が礼拝から押し出されていく私どもの生活のことを、今お読みしよう

な仕方ですべてしているので、礼拝の始まりではなく、礼拝の終わりについて少し述べておきたいと思います。

日曜日の礼拝の終わりは同時にこの世への派遣の始まりです。そのために派遣の言葉があります。それにつづく祝福は、世の中にあつて、家庭生活、職場の生活、市民としての生活、そうした社会の生活において、神がつねに共にいまし恵みと平安があるようにという祝福の言葉です。オルガンの後奏はそうした私どもを世に送り出す、一般に少し元気な曲になります。

こうした私どもの週日の生活を使徒パウロはローマの信徒への手紙で「霊的な礼拝」(ローマ12・1-2)と言っています。理性的な礼拝という訳もあります。理性的という意味は、何が神に喜ばれるか、何が神の御心なのか、それを人間の理性をもって判断しながら生活するということ、それを霊的な礼拝と言っています。私どもがいろいろな問題、課題に出会って、御心をわかまえ、信仰に立って適切な判断をなし、私どもの言葉、私どもの行いについて、キリストに従う者としてふさわしく歩むということです。そのことを今日のコロサイの信徒への手紙は、すべてを主イエスの名によつて語り行うようにと言っているのです。

日曜日だけが礼拝ではない。私どもはここから今遣わされていくその場所で、私たちの置かれているその場所で霊的な礼拝を捧げて歩みます。そしてこの週日の歩みはすべて感謝の一言に尽きるものです。「ハイデルベルク信仰問答」が救われた者の生活を「感謝」の一語でくくったように、つねに神様への感謝の思いをもって週日を歩んで行くように勧められています。

ここまでくれば日曜日の礼拝の始まりにも触れないわけにはいかないように思います。礼拝の始まりはどこなのでしょう。説教からでないことは言うまでもありません。礼拝への招き(招詞)からでしょうか。そうするとその前の奏楽は「前奏」ということになります。それとも前奏から始まるのでしょうか。もしそうなら「前奏」という書き方はおかしい。

こう考えたらどうでしょうか。礼拝から押し出されて世へと遣わされると先ほど申しました。その私どもは再び遣わした方のもとに、礼拝へと戻ってきます。戻ってくることに神様のお導きがあります。そこから礼拝はすでに始まっていると考えたらどうでしょうか。そうすると奏楽は、様々な思いをもって、とり分け悔改めの思いをもって、あるいはみ言葉に飢え乾いて神のもとに再び導かれる、もう一度神の前に進み出る、そうした私どもの思いを受けとめて新しい主の日の礼拝へと私どもを導き入れていく役割を果たします。その意味で前奏は少し静かな曲想になります。そして新たな礼拝は始まるということです。抽象的に「始まり」を決めることにほとんど意味はありません。礼拝から礼拝へ、神から神へ、私どもの生活はつねにそのまっただ中にあるからです。

2018年度の教会の方針の第1に私どもは、教会宣教基本方針(2011年)を受けとめて「礼拝の充実」が「最も重要な宣教活動である」という認識のもとに教会の歩みを進

めていくということを掲げました。礼拝をしっかりと守ることから歩み始めてまいり
ましょう。

(2018年4月29日)